

# 犬の人に対する攻撃行動をいかにマネジメントしていくか ～日本人、英国人飼い主の考え方の比較調査～

英国リンカーン大学 生物学研究室 菊地 三恵

## Management of owner attitudes towards human directed dog aggression in UK and Japan

Mie Kikuchi

Department of Biological Sciences, University of Lincoln

Riseholme Park, Lincoln LN2 2LG

キーワード: 犬の人への攻撃行動、接し方、知識、文化

Keywords: Human directed dog aggression, attitudes, knowledge, culture

### 1. 研究目的

近年室内で犬を飼う人が増加するに伴い、犬の攻撃行動は世界で最も深刻な問題行動となっており、飼い主への科学的なアプローチや各国での社会的な対応が求められている[1]。中でも人に対する犬の攻撃行動は頻度が高く、日本と英国でも最も困った問題行動の一つとして挙げられている。その要因は犬種、気質によるもの、飼育経験、日常の接し方、遊び方、最近ではトレーニング方法が指摘されているが、欧米を中心とする行動学専門家の間では人間側の接し方の中で、特に怖がらせる行動などが攻撃行動を引き起こす大きな原因になっているのではないかとされており[2]、その要因を解明する研究が進められている。

人が犬に適切に接していくためには、まずわれわれが犬の攻撃行動を生物学的に理解することが重要である。今までにそこに着目し、人が犬の攻撃行動をどのように理解しているのか、なぜそうなのかを世界レベルで比較した研究は存在しない。そこで本研究では飼い主が犬の攻撃行動をどう捉えて対応しているかを調査し、その上で生物学的な犬の攻撃行動への理解を深めてもらい、人の犬への接し方を変えて

いくことを目的とする。この研究そのものはウェブサイト・アンケート調査、e-learning 形式の調査を主なリサーチ手段としているが、今回はそのための先行研究としてインタビュー調査を行った。

犬の攻撃行動をどう理解するかは文化的背景が大きく影響していると考え、犬の人への攻撃行動を世界レベルで軽減させていくために、日本人とイギリス人飼い主を対象とした。

### 2. 背景

現在イギリスでは犬の飼育数は約800万頭で、犬は世帯数の22%である[3]。日本では犬の飼育数は約12万頭で、犬は世帯数の18%である[4]。

犬の飼育数は過去10年前よりも増加するに連れて、犬の攻撃行動による問題行動も増加傾向にある。犬が人を噛む攻撃行動は世界中で深刻な問題となりつつあり、適切な対処が必要とされている[5,6]。最近のイギリスNHS (National Health Service) の調査では、犬の人への攻撃行動の事故が2008年までの4年間で40%増加し、3,800件に及んでいる[7]。またペットの行動治療専門家の組織、英

国ペットカウンセラー協会がまとめた問題行動の統計でも犬の問題行動の第1位はとなっている[8]。

日本では問題行動の治療がまだ浸透していないために、問題行動に関してはほとんど調査されていないが、2006年に行われた帝京科学大学動物行動学研究室とベネッセ・コーポレーションのインターネット上の共同研究:飼い主が困る犬の問題行動では、869頭中3分の1がよその人、犬に対して吠える(恐れ、不安からの攻撃行動と考えられる)で第1位だった[9]。

さらに最近ではインターネットサイトで日本の飼い主向けにペットの情報を提供しているペット総研が日本の犬の問題行動をインターネット上で調査した結果、飼い主が困る犬の問題行動第1位は1067頭中約3分の1で吠える、第2位は約4分の1で噛む問題行動だった[10]。どちらも問題行動の対象が書かれていないため、攻撃の動機づけは明確ではないが、このように犬の人への攻撃行動が日本でもイギリスでも問題行動の上位を占めていることがわかる。

上記のように犬の人への攻撃行動が問題視されていることから、その要因の1つとして人の犬への接し方に関する研究が多くなされてきた。例えば犬を同じベットで寝かせる、犬に遊びを勝たせる、食餌を先に与えるなど犬を甘やかしたり[11,12,13]、擬人化している場合は、犬の優位性攻撃行動を引き起こしやすい傾向にある[14,15,16]ということが多くの研究で指摘されている。しかし現在ではそのような接し方が犬の優位性攻撃行動を引き起こすかどうか、またそうした時の攻撃性が犬の優位性から来ているものなのかを懸念する見方も出てきている[17,18]。最近では犬のトレーニング方法と犬の人への攻撃との関連性についての研究に注目が集まっているが、正の強化と正の罰両方を使う場合、犬の攻撃性が高くなる

ということが指摘されている[19]。飼い主の一貫性のない接し方が、犬の不安を引きこし、自己防衛的な恐れによる攻撃行動を誘導しているかもしれないという見方である[20]。しかし、それらの接し方も犬の攻撃行動をどう認識しているかによると思われる。

人の接し方は3つの要素 — 愛着(気分、感情)、行動(振る舞い、行為)、認識(アイデア、考え、期待、意見・信念)から成り立っているといわれている[21]。従って、犬の攻撃行動も人がどう理解するか(認識、Cognition)によるといえる。だからこそ、それを正しく理解して犬に接していくことが、犬の人への攻撃行動の軽減につながると考えた。

### 3. 研究方法

#### (1) 調査対象者

イギリスのインタビュー対象者は英国リンカーン大学の犬を飼っているスタッフ、犬のトレーニングクラスの飼い主、公園で散歩している飼い主11名で、事前に日程を決めて大学、または飼い主の自宅で面接を行った。日本のインタビュー対象者は札幌の動物病院、北海道大学獣医学部動物病院、およびドッグカフェ・ランで日程を決めてその場でインタビューを承諾してくれた飼い主53名に行なった。

#### (2) 調査方法

インタビューは半構造化され、準備した主要な質問に対して自由に答えてもらい、目的に添った答えを導き出せるようにし、必要に応じてそこに更なる質問を加えていった。そして対象者のうち4人が書く質問に対してほぼ同じ回答をし、これ以上新たな結果が生まれないと判断した時点を両国のインタビューを打ち切る基準とした。一人に対するインタビュー時間は約15分~30分であった。

#### (3) インタビュー内容

質問は2つの項目で構成された。今回のインタビューでは飼い主の犬の人に対する攻撃行

動をどう理解するかは飼い主の犬の選び方や飼い主にとって犬がどういう存在であるかが影響していると仮説を立て、項目に加えた。

#### ①飼い主の犬の飼い方

- 飼い主はどのようにして犬を選択したか
- 飼い主にとって犬の存在はどのようなものか

#### ②犬の人に対する攻撃行動への認識

- 飼い主はどのように理解しているか
- 飼い主はどのように防御すればよいと考えているか

### 4. 結果と考察

日本人飼い主の多くはペットショップから犬を入手しており、見かけのかわいさで犬を選ぶ人が多かった。また犬の入手前に犬種のことやどこから犬を入手するかを調べて犬種を選ぶ人は少なかった。一方イギリス人飼い主はシェルター、もしくはブリーダーから犬を入手し、見かけよりも気質や行動で選ぶ人が多かった。またイギリス人飼い主全員は犬の入手前に犬種やどこから犬を入手するかについて調査し、犬と時間をかけて交流してから犬を選択していた。

日本人飼い主の多くが犬の存在を「子供のよう存在」と答えたのに対し、イギリス人飼い主の多くは犬の存在を「家族の一員」と答えた。

犬が人を噛む一番の理由は何かの質問に対しては、すべての日本人飼い主は犬が人を噛むのは飼い主の責任であり、飼い主が十分にしつけができていなかったからと答えた。また噛む行動を防御する方法として子犬の時の社会化や陽性強化でのトレーニングを挙げる人は多かったが、体罰(力づく)でのしつけを挙げる人も多かった。一方、イギリス人飼い主全員は犬が噛む理由は状況によると答え、防御する方法として多くの人がなぜそれが起こったかを把握することの大切さを指摘した。

上記の結果から、日本人飼い主は犬に対する

根本的な姿勢として、犬を感情ある生き物として接するよりも、一方的に自分の道具として接している傾向にあると見られた。それに対してイギリス人飼い主は、日本人飼い主よりも犬をよく理解しようという意識が見られ、犬を動物として扱おうとする姿勢がうかがえた。この姿勢は犬をどれだけ理解できるか、犬の人への攻撃行動をどう理解するかにもつながると考察できる。さらにこの考え方の相違は文化的な側面が影響していると考えられる。従って、次の段階ではこの相違がどこから来ているものを明らかにすることが必要と考える。

イギリス人飼い主は日本人飼い主よりも犬を入手する以前に情報を収集し、犬を迎え入れる準備を行っていることや日本人飼い主の多くは犬を入手した後に情報を収集しようとするのが示唆されたが、ここで重要なのは情報そのものが適切であるかどうかである。質の高い情報を収集することが、犬の攻撃行動を生物学的に理解する鍵になると考えられる。調査の結果、イギリス人飼い主の多くがインターネットを利用して情報を収集していたように、現在ではインターネットを初め、携帯電話、サテライトチャンネルなど、最新技術の媒体を通して簡単に情報を収集できる[22,23]。言い換えれば情報が氾濫しすぎて、選択が難しくなり、不適切な情報も収集しやすいとも言える。

犬の人への攻撃行動を軽減させるための第一歩として質の高い情報（生物学的な見解）を飼い主の提供することが大切である。今回の調査結果では日本、イギリスの飼い主はインターネット、本、雑誌をよく利用して調査するという結果が得られた。次の段階ではこれらの媒体で犬の人への攻撃行動はどのように紹介されているかを調査し、不適切や未熟な情報に共通の傾向があるかを明らかにした上で、インターネットを通してそれを補う正確な情報を飼い主に提供していく目安にする必要があると考える。

参考文献

1. Mills.D.S, Levine. E. (2006). The need for a co-ordinated scientific approach to the investigation of dog bite injuries, *The Veterinary Journal* 172, 398-399
2. Heath, S. (2005). WHY DO DOGS BITE? *EJCAP Vol. 15 Issue 2*
3. UK Pet Food Manufacturers Association (2009). <http://www.pfma.org.uk/>
4. 日本ペットフード工業会 (2008). <http://www.jpffma.org/topics/topics0402.html>
5. Van Eeckhout, G.P.A., Wylock, p. (2005). Dog bites: an overview. *European Journal of Plastic Surgery* 28, 233-238.
6. Morgan, M., Palmer, J. (2007). Dog bites. *British Medical Journal* 334, 413-417.
7. NHS Statistics(2008). <http://news.bbc.co.uk/1/hi/health/7264620.stm>
8. APBC.(2005). <http://www.apbc.org.uk/about.htm>
9. Benesse Corporation. (2007). [http://www.benesse.co.jp/newsrelease/20070420\\_001.html](http://www.benesse.co.jp/newsrelease/20070420_001.html)
10. ペット総研 (2011). <http://www.pet-soken.jp/about.html>
11. Rogerson, J. (1989). The dominant dog: its relationship with owners and family. Paper presented at Monaco '89, 5<sup>th</sup> International Conference on the Human-Animal Bond. 15-18 November 1989, Monaco.
12. Rogerson, J. (1993). Preventing aggression. *In: Fisher J. (Editor), The Behaviour of Dogs and Cats. Stanley Paul, London, pp. 52-61. UK.*
13. Fisher J. (editor), *The Behaviour of Dogs and Cats. Stanley Paul, London, pp. 104-112. UK.*
14. O'Farrell, V. (1987). Owner attitudes and dog behaviour problems. *J.Small Anim. Pract.*, 28: 1037-1045.
15. Voith, V. L., Wright, J.C. and Daneman, P. J. (1992). Is there a relationship between canine behaviour problems and spoiling activities, anthropomorphism, and obedience training? *Appl. Anim. Beha. Sci.*, 34: 263-272. USA.
16. Peachy, E. (1993). Problems with people. *In: Fisher J. (editor), The Behaviour of Dogs and Cats. Stanley Paul, London, pp. 104-112. UK.*
17. Jagoe, A. & Serpel, J. (1996). Owner Characteristic and interaction and the prevalence of canine behaviour problems. *Appl Ani Behav Sci.* 47, 31-42.
18. Bradshaw. W.S. J, Blackwell, E. J, Casey. R. (2009). Dominance in domestic dogs—useful construct or bad habit? *Journal of Veterinary Behavior: Clinical Applications and Research* Volume 4, Issue 3, May-June 2009, Pages 135-144
19. Blackwell, E. J, Twells. C, Seawright. A, Casey. R. (2008). The relationship between training methods and the occurrence of behaviour problems in a population of Domestic dogs. The 6<sup>th</sup> International Veterinary Behaviour Meeting. 68.
20. Heath, S. (2005). WHY DO DOGS BITE? *EJCAP Vol. 15 Issue 2*
21. Rosenberg, M.J. & Hovland, C.I.(1960). Cognitive, affective, & behavioural components of attitudes. *IN: Rosenberg, Hovland, McGuire, Abelson & Brehm (Eds.) Attitudes Organization & change: An analysis of consistency among attitude components, Yale University Press, USA.*
22. The Ministry of Public Management. (2009). <http://www.soumu.go.jp>
23. UK National Statistics.(2010). <http://www.statistics.gov.uk/hub/index.html>